

Title	正義と寛大：商業との関連で ジョン・ミラーの経済思想(4)
Author(s)	田中, 秀夫
Citation	経済論叢 (2000), 166(5-6): 36-52
Issue Date	2000-11
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/45383">http://dx.doi.org/10.14989/45383</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# 經濟論叢

第 166 卷 第 5・6 号

---

信用の経済学……………	古 川 顯	1
正義と寛大：商業との関連で……………	田 中 秀 夫	36
二輪産業の国際競争関係と アメリカン・ホンダ・モーターの設立……………	太 田 原 準	53
企業内訓練，調整コスト及び雇用調整（1）……………	高 畑 雄 嗣	74
K. W. カップの社会的費用論； その認識論的側面……………	山 根 卓 二	93
台湾における産業構造の変化と 中小企業の対応……………	高 杏 華	109
中国の自動車流通システムの変遷過程（1）……………	劉 芳	131

經濟論叢 第165卷・第166卷 総目録

---

平成12年11・12月

京 都 大 学 經 済 學 會

## 正義と寛大：商業との関連で

——ジョン・ミラーの経済思想（4）——

田 中 秀 夫

「慈愛（beneficence）は，社会の存立にとって，正義よりも不可欠というわけではない。社会は慈愛がなくても，最高に快適な状態ではないにしても，存立しうるが，不正が横行すれば，社会はかならず破壊される。」

（Smith [TMS] II. ii. 3. 3, 邦訳135ページ）

「人間愛，正義，寛大，公共精神は，他の人びとにとってきわめて有用な諸資質である。……寛大と公共精神の適宜性は，正義のそれと同一の原理に基づいている。寛大は人間愛とはちがう。……人間愛は女性の徳であり，寛大は男性の徳である。」

（Ibid., IV. 2. 9, 邦訳290ページ）

### はじめに

筆者はこれまで，ミラーの経済思想を究明すべく，狭義の経済思想から，隣接領域との関連におけるミラーの議論の検討へと進んできた。前回，経済と道德の関係にかんするミラーの議論のうち「真面目と節制」論を取り上げたが，今回は，師のスミスが『道德感情論』で力点を置いた「正義と寛大さ」（Justice and Generosity）についてのミラーの議論を取り上げることにする。

この主題を取り上げる以上，とりわけスミスとの議論の比較が必須であるが，スミスの議論は，よく知られているので，必要に応じて想起すればよいであろう。ただし，スミスの議論は正義が守られればそれだけでよいのであって，慈愛や寛大さはなくてよいというものと理解するのは，単純すぎる理解である。スミスは優先順位を述べて，まず正義が必要不可欠であると言っているにすぎない。社会はたんに成立すればよいというものではなく，快適な状態にあるほうが望ましいとスミスは考えており，そのためには慈愛や寛大さもまた必要であるという主張にスミスの真意があったと理解すべきである。スミスは寛大

(generosity) 以上に慈愛 (beneficence) と仁愛 (benevolence) について多く語っているし、厳密にはこの三概念は区別しなければならないと思われるが、いずれも自己否定・自己規制を意味する利他的行為を指令する感情として共通の性質のものであると言えるであろう。ミラーはすぐ後にみるように、寛大と仁愛を同一視している。

ミラーは『英国統治史論』の第4巻第6章第3節において「正義と寛大」を論じている。正義と寛大の定義から始まるミラーの議論の主要な論点は、(1) 商工業の発展と正義との不可分の関係、(2) 商工業の発展と寛大との対立傾向、(3) 商業の精神と家族関係・友人関係などの親密圏との対立関係、(4) 商業国における正義の徳と非行の逆転現象、以上の4点に大別しうるように思われる。

以下、ミラーの議論の概要を紹介しよう<sup>1)</sup>。ミラーはこう論じ始める。「人類の徳と悪徳は、より直接的に、当人自身の利害が他人の利害かに関係する。前者の部類はすでに考察された。後者は別の検討に値する。」(p. 235) つまり、正義も寛大も他人の利害にかかわる徳性だというのがミラーの理解である。この理解はスミスのそれと同じである。ミラーは師のスミスに従って「観察者」(spectator) 理論を援用して、まず次のように寛大と正義を定義する。

「わたしたちの行為が隣人の幸福を促進するとき、あるいは逆の傾向をもつとき、すべての観察者は、こうした異なる場合のわたしたちの行動を是認または否認するのであるが、しかし、わたしたちが、適切に、ある仕方で行為するよう強いられたり、他の仕方で行為することを慎むように強いられることができるとは誰も想像しないということが、しばしば生じるであろう。」(p. 235) 好意に対して感謝で報いたり、友人のために自らの財産を賭したり、特別の関係がない人の苦難を軽減したりすることは、こうした性質の行為である。

これらは「寛大あるいは仁愛」(generosity or benevolence) に属す。スミ

1) 以下ミラーからの引用は Millar[1803] Vol. 4 からである。引用にあたってはページだけを記す。

スはこの寛大を男性の徳としているが、ミラーにはそのような指摘はない<sup>2)</sup>。

「他方、わたしたちの隣人への関係が厳密な義務の問題になる場合、わたしたちがある方向の行為に従うように強いられ、その逆に対しては処罰される場合も多くある。」(pp. 235-236) わたしたちは約束を履行するように、また他人を傷つけないように強いられる。こうした行為は「正義の規則」に属す。以上の議論には特段ミラーに独自のものはないのであろう。

ミラーは端的に次のように述べている。「技術、手工業、および商業の発展がすべての部門において正義の徳を改善する傾向があるということは、疑えないと思われる。」(p. 236) この見解は、言うまでもなく、モンテスキュー<sup>3)</sup>やスミス<sup>4)</sup>などが注目し、堀りさげてきた認識を踏襲したものである。ミラーは

2) 「われわれ男性よりも、はるかにやさしいのがふつうである女性は、われわれほど多くの寛大さをめったにもたない。……人間愛はたんに、主要当事者たちの感情にたいして観察者がいなく、鋭敏な同胞感情、すなわち、かれらの受難について悲嘆し、かれらのうけた侵害にたいして憤慨し、かれらの幸運を喜ぶほどの、同胞感情にある。もっとも人間愛のある諸行為でさえ、なんの自己否定、なんの自己規制、適宜性感覚のなんの大きな行使も、必要としない。……しかし、寛大については事情がちがう。われわれはなにかの点で、だれか他人をわれわれ自身に優先させ、われわれ自身のなにか大きく重要な利害を、友人または上長の等しい利害のために犠牲にする、というばあいではなければ、けっして寛人なのではない。」(Smith [TMS] IV. 2. 10. 邦訳290-291ページ)。

3) モンテスキューはたとえば次のように述べている。「……商業の精神は、質素、倹約、節度、労働、賢明、平穩、秩序および規則の精神をみちびく……」Montesquieu [1973], 邦訳, 上, 116ページ。「商業は破壊的な偏見を癒す。」同上書, 邦訳, 中, 201ページ。「商業の自然の効果は平和へと向かわせることである。……すべての結合は相互の必要に基づいている。……商業の精神は諸国民を結びつける……商業の精神は人間の中に厳密な正義についてのある感情を生み出す。この感情は一方で掠奪と対立し、他方であの道徳的徳、すなわち人に自分の利益を必ずしも執拗に主張しないようにさせ、他人の利益をはかって自分の利益を顧慮しないようにさせるあの徳と対立する。」同上書, 邦訳, 中, 202ページ。

4) 中下層階級では徳への道と富への道は一致するという『道徳感情論』第6版の加筆はスミスの代表的な発言である。「すべての中流および下流の職業においては、真実で堅固な職業的諸能力が、慎慮、正義、不動、節制の行動と結合すれば、成功しそこなうことはめったにありえない。……中流および下流の、生活上の地位にある人びとは、けっして法律を越えるに十分なほどえらくはありえず、法律は、すくなくとも正義の諸規則のうちの重要なものにたいしては、ある種の尊敬をもつように、かれらを威圧するにちがいない。そのような人びとの成功はまた、ほとんどつねに、かれらの隣人と同輩との、好意と好評とに依存するし、かなり規則正しい行動がなければ、それらは、めったにえられないのである。したがって、正直は最良の方策だというむかしからのことわざは、このような境遇においては、ほとんどつねに完全な真理としてあてはまる。」(Smith [TMS] p. 63, 邦訳96-97ページ)。

不正を避けようとする動機に「人間愛の感情」<sup>5)</sup>も挙げるが、こうした配慮が自らの利益にもなるという考慮にも注目する。ミラーは、この二つの原理は商業国民においては独自の事情によって強化されるという。ではどのような事情によってであろうか。

#### I 商工業の発展と正義の不可分の関係

ミラーによれば、商工業の発展は契約と取引を無限に増加させ、それに比例して個人の所有物も増加し多様化する。そうすると、契約違反、不誠実や詐欺、財産の侵害から生れる不正は、これまで以上に鋭敏に感じ取られ、従来以上の「同感と遺憾」を生み出す。同時に正義の規則を守ることから生れる利益もそれに比例して増加し、明白になる。「社会の交通が拡大するにつれて、ますます大きな相互の信頼と信用が必要となるが、それは誠実と公正を常に表明し、厳密に実行することなしには、維持できない。」(p. 237) 公正な性格を持ち続けられない人は、どこでも非難を受け、儲け仕事を行う資格がないのであって、ある種のアウトカーストになる。こうした恐ろしい不幸に比べれば、狡猾な悪行で得られる利益などは物の数ではない。

したがってミラーによれば、正義の規則を推奨し教え込むことが早期教育の課題となる。時宜を得た矯正とそれに随伴する恥辱によって、子供は間違いをおかすことを思い止まるようになる。子供に対する教育、規律化、陶冶への疑問は、当然のように、ミラーにはない。長じてからは、人間の一般的感情が指令し、社会の異なる階級と身分に伝えられる名誉の原理が正義の教義を強固にする、とミラーは言う。さらに「人間のあいだで恥ずべきことを、神への冒瀆として、また神の不興の帰結を招くものとして、表象することによって」(p. 238)、宗教も役に立つ。他方、市民政府は、処罰によって、無秩序を制圧する。このようにミラーは、正義を商工業と結びつけるだけではなく、教育、名誉感

5) 先の引用文にあるように、スミスは「人間愛」を「優しさ」と解釈し、とくに女性の徳と理解したが、ミラーにはそのような区別はない。

情、宗教、統治とも関連づけている。この関連づけは明らかであろう。商業と正義は密接に関連があるけれども、正義がゆきわたるためには商業だけでは不十分なのである。教育も、名誉感情も、宗教も、統治も必要だというのがミラーの理解である。けれども正義を考えるとときの力点は、明らかに、商業に置かれている。

商業国ではすべての住民が同じように正義の規則に忠実なのだろうか。容易に予想されるように、ミラーは一般的に取引を頻繁にする住民が正義をもっともよく守るという。すなわち、商業時代、商業国を特徴づけるこのような正義の原理と習慣は、住民のうち、実際に商業に携わっている部分においてもっとも著しいように思われる。彼らは上述の様々な動機の影響をもっとも強く受けるからである。「ヨーロッパの大部分の商業国民においては、商品価格を高めるために偶然の稀少性を利用することは、公正な取引 (fair trade) と対立するとは考えられていない。しかし、信用のある商人は直ちに取引し、顧客の無知を利用しないのが習慣である。」(pp. 238-239) 時々しか取引しない住民の場合は、同じような良心的な律義さは求められず、値切ったり、欺いたりすることはあたり前である。競走馬のような価値の恣意的な商品の場合はとくにそうである。

未開な国民の習俗は商業国民のそれと正反対であり、他の徳はどうあれ、野蛮人は正義の規則をほとんど知らない。彼らは約束を顧慮しないし、窃盗や略奪はあたり前である。ミラーは歴史から明らかなと断言して、興味深い例をいくつか挙げている。クック船長のオタヘイテ島への最初の航海で、住民は窃盗を何ら恥じなかった。カムチャッカではかっぱらいに熟達している証拠を見せるまで、若い女性は結婚が困難である (典拠はロシアの密使)。古代エジプトでは窃盗は罰せられなかった。ガリア人の間でも、他部族との間の犯罪は処罰されなかった (典拠はカエサル)。スコットランドの高地地方では家畜の窃盗はリフティングと名づけられた。それは何ら非難を意味しなかったと思われる言葉である。「1745年の反乱の鎮圧のさいに、王位僭称者をかくまい、政府の

莫大な報奨金でも彼を引き渡そうとは思わなかったあるスコットランド人は、その後、インヴァネスで裁判にかけられ、馬の盗みゆえに極刑を宣告された。」(p. 240)

商工業が高度に発展した国では、商人は取引でもっとも公正で几帳面であるが、しかし商業の幼年期には、彼らはもっとも不正で誠意が無い。その理由についてのミラーの考察は興味深い。ミラーは(1) 軍事の優位、(2) 定期市の不在、(3) 安全の欠如をその理由としている。

(1) 未開で軍事的な時代には、職人と商人は、定住職であり、非好戦的ゆえに軽蔑され、したがって、低い評価ゆえに、自ら墮落し、性格と行動を顧みなくなる。「最初の商人は一種の行商人であって、方々を彷徨し、しばしば見知らぬ他人にパンと宿所を乞う必要に陥ったのであって、肉親や知人のなかで定住している職人あるいは労働者よりさらに卑しい境遇にある。」(p. 241) ユリシーズは放浪商人と嘲られたとき、それに耐えられずに、肉体の傑出した力を発揮して、汚名をそそごうとしている。古代ローマ人は軍事的であった限りは、商人を自由人には不名誉な職業と考えた。近代ヨーロッパでも、商工業者は何世紀も隷従階級であった。

(2) 定期市の不在。商業発展の夜明けにおいては、商品価格を確認するための定期的な市場がなければ、個人の欺瞞を暴いたり規制したりすることは難しい。行商人は見つかるといふ危険を冒して、利潤を増やせる偶然の機会を利用したいという誘惑にかられる。したがって、商業が未発展の国では商人という職業は悪行と不正に特に関係があると考えられている。初期のギリシャでは商人と私人はほとんど同義語とみなされた。商人を統括する守護神は、詐欺と窃盗の援護者ともなった。同郷人の習俗に基づいていると思われるが、キケロは、どこからでも財貨を仕入れる大卸売商人は、寛大な性格であり、すぐに売るために買う小売商人は卑しい職についている、というのは人嘘付きとならなければ儲からないからである、と言明している(典拠はキケロ『義務論』)。ポーブは軽率にもこの見解をイングランドの商人にあてはめている。



(3) 安全の欠如。アルメニア、ペルシャなどの東洋では、商業はたいい遍歴商人の営みであって、政府に保護どころか、むしろ略奪されがちである。財を隠したり、宝石に変えたりせざるを得ない人々が、取引で律義であるとは期待できないし、ある場合の損害と危険を償うために、他の場合で大儲けしようとしなれないと思えない。ユダヤ人は特異な習俗と習慣、普通でない宗教儀式のために、他国民から嘲笑され、憎まれもした。「このような不運な事情のなかで、彼らは卑小な職においてほとんど堕落せず、したがって、いくぶんか恥ずべきだと考えられた時代と国において、きわめて一般的に商業に勤しんだ。」(p. 244) キリスト教がヨーロッパに広まってからはとくにそうである。彼らは近代ヨーロッパ諸国民の最初の主要な商人となり、膨大な富を得た。当時の商業の状態と一致して、彼らは普遍的に悪行と不誠実という性格を身につけた。その汚名は「商人の地位と行動の大革命」(p. 245) が起った今日でもそそがれていない。

以上が徳としての正義論の概要である。この正義論は、『道徳感情論』におけるスミスの正義論に比して、きわめて簡単である。正義を人間の行為と感情の適宜性に求め、それを傍観者の共感＝同感に基礎づけるスミスの試みは、まったく新しい正義論の構想であったし、そのためにスミスは詳細な検討を行う必要があったとすれば、ミラーはスミスの理論に正義論の基礎づけをゆだねることができたと理解してよいであろう。現に、ミラーはスミスの観察者理論を継承して、観察者の是認に正義を結びつけたことは先に見たとおりである。次にミラーは寛大＝利他心と商工業の関連を問題にする。

## II 商工業の発展と寛大との対立する傾向

ミラーは言う。商業で豊かになった国民の事情は、正義に好都合であるのに対して、寛大には不都合であり、仁愛の発揮にはいっそう不都合である。なぜならば、正義の規則を守るべきであるというのは、自らの利益を理解するだけで分かるけれども、人が際立って寛大さや仁愛をもつためには自らの利益を他

人の善の犠牲にしなければならないからである。「正義は究極の遥かに大きな利益を獲得するために一時的な利益を退けるという意識的な目的追求の結果である。」(p. 246) 寛大は個人的、利己的考慮を無視する激しい衝動の産物である。ミラーが寛大の理解においてスミスを継承していることは、先にも指摘したように、明らかである。

注意深く吝嗇な商売人や勤勉で行動的な手工業者は、自分の利益を顧みないことはほとんどないし、仁愛をかき立てられることもほとんどない。「正しいことは自らの自然の要素を呼吸することであり、慈愛心のあるように要求することは彼の通常の働きを逆にするものであり、慣れていない器官で生きるようにさせることである。」(Ibid.)

商業国では、正義を旨とする商業精神は商工業者に限られず、境遇が似ているために、ある程度はすべての身分と階級に浸透し、習慣と実例の影響から、ある程度、社会の全員に伝えられる。個人は一般的基準に従って「適宜性」の観念を形成し、時代の主流の趣味にあった道徳を流行らせる。社会の中で多く暮らし、親密な交流を維持するので、彼らは思想と感情をすみやかに伝える。相互の感情を傷つけずに、経験によってそうするようになるし、自分の利己性や他人への軽蔑を隠し、温和、敬愛、尊重という雰囲気を漂わせ、無理して堪えているという表情を見せずに、自分の行動を仲間の気質に調整するようになるのである。このようにして、優雅さや洗練の作法を向上させ、相互の喜びと苦しみに参加することによって、喜びを増し、苦しみを減らそう、和らげようと相互に努力することによって、「社会的感情」(social feelings)を養う。

しかし、「このような交流はしばしばたんに相互の良い労務を買おうとするだけの些細な取引に過ぎない。あるいはそれがよりすぐれた動機から生れるとき、それはより下位の、ある程度思弁的な人間愛の子孫である。その人間愛は、切実な苦難の場合には、不幸な人のことを涙を流して嘆くことで満足するのであって、彼に救いを与えるために大きな利益を犠牲にすることは決して考えない。」(p. 247) このようなミラーの発言には、偉大な行為、自己犠牲的な行為

を無くしてしまう商業社会への失望を読みとることができるであろう。

「このようなわずかな利益の安物の交換を人々は価値以上に評価しがちである。しかし、実際は不便を除去するうえで、またわが人生の旅路に伴う慰安を向上させるうえで、素晴らしい効用を持っているとはいえ、そのような交換でさえ、商業国民の活動的な追求のなかで発生する反対の不調和な情念によって、しばしば妨害される。」(p. 248)

ミラーは明らかに、商業社会を批判的に眺めている。ミラーは自由主義者であり、個人主義者であるという理解は基本的に正しいであろう。文明＝商業社会が封建的・人格的な支配・抑圧から民衆を解放する限り、ミラーは商業的个人主義を支持した。しかし、ここに見られるように、ミラーは寛大や公共精神の衰退に憂慮を隠さない共和主義的人間観の持ち主でもあった。

「勤労や蓄積の欲望のほとんどない未開時代には、隣り合った独立の社会は相互に略奪しがちであるが、しかし同じ社会の成員は共通の利害によって引き付けられ、相互の仁愛の發揮や、偶然に共感を抱くという習慣をもつことによって、友情と愛情の絆で強く結ばれる。しかし、誰も怠惰ではなく、誰もが自分の財産の増大あるいは自らの境遇の改善を熱心に求める国では、無数の競争と対抗が発生し、それが心を狭くし、人間を不和にする。各人が彼自身の昇進に注意するに応じて、彼は自らの繁栄を妨げる障害に悩み苦しみ、競争相手を羨望、憤慨、その他の悪意のある情念で眺めるのである。」(pp. 248-249)

こうして、富の追求は各人が相争う争奪戦となる。ここから同じ商売、同じ職業の者同士の紛争が生れ、それは利害の対立がより直接的で尖鋭になるにつれて、いっそう日立つようになる。「小都市の内科医、薬剤師、法律家は一般に言葉を交わす間柄でない。彼らは自らの成功をもっと大きくしたいというので、互いの成功を妨害し、反対するのであって、各派の顧客でさえしばしば争いに巻き込まれる。」(p. 249) これほど無礼、暴力的なことはないとしても、同じ原理は、商業世界全体に行き渡っている。「商売に友情はないというのは商売人の間では確立された格率である。各人は自らのために、全能の神は万人

のためにが、彼らの基本的教義である。」(Ibid.)

活動的で洗練された国民の間では、名声と傑出を求める欲望がもっと激しい競争と嫉妬を生み出す。年齢、性別、身分を問わず、知者も愚か者も、学者も無知な者も、この普遍的な情念に発する重大で、愚かしい不和、名誉欲がかきたてる辛辣や悪意を免れない。それは社会の隅々まですると滑り、才覚あるいは心地よい才能の好敵手という姿——舞踏会に登場する美しく着飾った洒落者から議會をうならす雄弁な弁士までの——を示して見せる軽やかで空虚な虚栄の形で現れようと、あるいは人類を党派に分かれ、党派熱と党派的憎悪を煽り、群衆のなかに隠れて、羞恥心に挑戦し、人間愛の声に耳を貸さない重々しい野心の姿をとろうと同じである。この情念では、著作者の間の嫉妬がもっとも著しい。そうなるのは、当事者が論争を出版し、憎悪を流通させる能力を持っているからである。

ミラーは言論の自由が可能にしたイデオログたちの論争をこのように見ている。

「富の追求という商業国民の大きな目的は、羨望と利己心、奢侈的、官能的習慣の種を蒔き、前述のように、それらは国民の間で広まり、有害な産物を育て強める傾向がある。」(p. 251) 官能の快楽は、食に関するものも、男女を結合する性質のものも、すべて利己的な性質のものである。社会的性質の発揮と多くの場合は関係しているとしてもそうである。エビクロス派の歓楽は趣味の満足に終わる。奢侈的な時代の愉快な集いは、最上の晩餐を楽しめる仲間を好む。恋愛の快楽は感情の交流を前提するけれども、肉欲の満足は相手を破滅させることをいとわない。

しかし、もっと注意すべきことがあるとミラーは言う。富裕な国民で流行する快楽は大出費の原因となり、大衆は収入以上に出費してしまって、借金をする破目になることである。こういう習慣に耽る人にとっては富が常に偶像であり、幸福をもたらす主権者である。このような富裕な国民の習慣は貨幣愛を強めることによって、すでに強くなっているバイアスをさらに強化する。そのバ

イアスは富の獲得の拍車となるとともに出費も促進させる。同じ食欲でも、節儉な時代の食欲と奢侈的な時代の食欲では異なった性格をもつ。前者の性格は守銭奴の性格であり、蓄蔵術という卑しい営みをためらわない。彼は貧困の恐怖につねに晒されているので、利子付で貨幣を貸すことを恐れる。したがって貨幣を地中に隠すという惨めな用心をするのである。このような守銭奴は古代の詩人が表現しており、モリエールが模倣している。近代の高利貸は古代の高利貸に劣らず食欲で常に利益を追求しているが、企業心に勝り、労働の成果をすぐに忘れることはない。財宝を蓄蔵して小銭を失うことはない。貨幣愛と快樂好みに刺激されて、彼は食欲と贅沢、感覚の満足を追求する。

こうした考察からミラーは結論する。富裕で奢侈的な時代の習俗、生活様式は、社会の全般的交通に好都合である。近隣の知り合った一般の関係から、個人が自らの利益を他人の利益のために犠牲にすることは期待できない。「誠実と忠実という点で相互の信頼を生み出すために、人々が犯罪をおかさなくなり、様々な取引で正義の規則を守り、言葉に忠実であるなら、またこうした徳に人々が人間愛と快を与えたいという欲望によって指令される下位のよき尽力の不断の遂行を付け加えるなら、人々は相互に意思疎通し、望まれてもっともなすべての安全、安心、および平静、またすべての慰安と満足を享受しやすくなるであろう。」(p. 254) こうした相互の徳の遂行は、日頃繁栄している人々に、富の蓄積を容易にし、勤労の成果を確保するに十分であろう。また貧窮に陥っている人々に穏当な救済と支援を与えるに十分であろう。「仁愛のいっそう高度な發揮は問題外である。しかし限られた規制された慈善は、洗練した文明国民の生活様式と完全に一致する。」(pp. 254-255) こうした性質の慎慮がありよく規制された慈善の介入からは、「優しい心の思慮のない慈愛心の最高に暖かい時折の噴出」から以上に、大きな利益が公共にも個人にももたらされる傾向がある。「正義の規則の厳格な遵守なきたんなる慈愛心は、慈愛心をまったく欠くとしても、正義の規則ほど、社会の繁栄とよき秩序に影響を与えない。」(p. 255)

## III 商業の精神と親密圏の対立

しかし、富裕な商業国民の精神は、一般的関係においても遠方の関係においても、人類の交通を改善するけれども、私的な親密な関係については異なる。「家族関係においては、人類の幸福は、市参事会員のような正義の徳によりも、友情と仁愛の温かさにより依存しているように思われる。」(Ibid) 甘い夫は妻が彼のものをこっそりくすねないという以上のことを期待する。父には子供を害さない、あるいは小さな慈愛を与えるという以上が求められる。私的生活の主要な幸福をなす家族の愛は「共感と友情」の様々な変形に他ならない。こうした愛情は商業的、奢侈的時代の特有の習俗によって改善されることはありそうにない、とミラーは分析する。この時代には結婚はほとんど常に利害絡みの関係となり、金銭的考慮が結婚生活を通して優勢となりがちである。結婚は夫にとっては金銭で生活を買うことであり、妻にとってはうまくおとりをもうけることである。富裕と奢侈の影響は親子関係にも有害である。世間の貪欲な儲け仕事に没頭している父は、家族を快樂に対する税金のようにみなしがちであり、子供が肘にぶら下がっていると思いがちである。子供は長じるに連れて要求が大きくなり、父の個人的出費の節約を求める。両親がより良心的で、時代の悪徳に染まっていない場合でさえ、彼らは子供の行動に惨めな失望と悔しさを抱きがちである。子供は、親の甘さゆえの期待と心配に背いて、悪例と利己主義で墮落し、怠惰と浪費に時間を無駄使いし、さらには世襲財産が完全に自分のものになるのをじりじりして待つ。将来の財産分与さえ、子供には、相互の愛情を毒し、快い交際を妨げる不満の種となる。

商業精神は、親密さ、趣味や性質の類似などによる友人同士の愛情とも対立する。したがって、金銭的利害にとらわれることもなければ、相互の保護と防衛のために、たびたび努力しなければならない未開人の状況のほうが、商業国民の状況より、友情には遥かに好都合である。「学識をもったラフィット神父は、アメリカの未開人の間では、個人は完全な財産共同体を生み出すような親

密な友情を形成するのが普通であると述べている。」(p. 258) 彼らは別個の利害をもたない。相互のために命を犠牲にすることは義務とされている。戦士が敵の捕虜となって、拷問で殺害されたときは、特定の人物の名を唱えて彼の復讐をする。この人物は復讐を求めて殺害現場を彷徨する彼の内心の友なのである。ラフィットーはアメリカの未開人の友情と古代ギリシャの戦士の友情——ヘラクレスとイオラス、テーセウスとペリテウス、アキレスとパトロクルス、オレステスとピラデスなど——を類似の性質のものとして比較している。このようなミラーの考察は未開—文明の相反的な分析の一側面をなしている。未開人や古典古代の戦士の熱い友情に比べて商業国の友情は冷めているとミラーは分析する。

ミラーによれば、奢侈的商業国の友情はそれとは異なり、冷静で、熱狂的でなく、命や財産の犠牲を要求するような留保なき確信をもたらすことはない。「友達の繁栄を喜び、不都合なく出来るときに彼の苦しみを軽減してやり、いつも好意ある忠告で彼をたすける用意があれば、それで十分である。」(pp. 259-260) しかし、彼は、ある日突然、彼の敵となるかもしれないという心構えで彼に対して振る舞うべきだという、有名な慎慮の格率を忘れてはならない、とミラーは付け加えている。つまり商業的利益が友情を破壊する場合があるというのである。良くも悪しくもそれが商業社会の論理であるというのがミラーの観察である。

#### IV 商業国における正義の徳と非行の逆転

すでに見てきたように、ミラーが提示した一般原理とでもいうべきものは、正義の徳は富裕で奢侈的な国民において優位するというものであったが、しかしながら、この順序が逆転する状況がしばしば起るとミラーは言う。このような国民の間では、正義の規則の厳密な遵守は、「主に利害の考慮と、そうした考慮に基礎を置く一般的な行動基準の確立」から生れる。これは、貪欲の感情を規制し制御するのに寄与する「人為的な規律」の結果と考えてよい。しかし、

貪欲の感情は、富裕な商業国では、急速に強められ、支配的原理となりがちである。したがって、多くの人間がたまたま同時に同じ非行に走り、侵害によって巨大な利益を獲得するという異例の状況が起りうるのである。非行者が多数であり、ある程度相互に知らぬふりをする階級であるとき、彼らは突発的な衝動に負けて、それまで従ってきた規制を破って、巨大な犯罪行為へと突っ走るのである。

古代ローマの属州の役人はこのような誘惑を受けた。彼らは住民に対してほとんど無制限の権威をもち、元老院の規制以外に服さなかった。元老院議員は、類似の職務を持っていたので、属州の役人に仲間意識を持っており、彼らの職権濫用を厳しく判断しようとはしなかった。彼らの数は膨大であったので、譴責は軽くなった。また首都からの距離が彼らの行動を隠蔽した。こうした事情で、蓄積への熱望が燃え盛って、彼らは正義と人間愛の規制を打ち破って、強奪、詐欺、抑圧の手段をすべて実行した。役人は同一の地方に1年ないし2年以上は留まらなかったで、時間を失ってはならなかった。巨大な富を蓄えて、こうした熱心な活動の成果を楽しむためにローマに帰ったとき、彼らは彼らが略奪した人民に法外な利子で貨幣を貸すことによって、自らの財産を増加する別の手段を見出した。この種の商業が非常に広まったので、法が禁じていたにもかかわらず、それは不名誉と考えられなかった。法定利子は12パーセントと定められていたが、最も尊敬すべき市民は40ないし50パーセントの利子を取りたてたように思われる。

最後に、ミラーは東インド会社批判を展開する。「独占の特権」を与えられた東インド会社は、古代ローマの属州の支配者に類似した境遇にある。蓄積はいっそう体系的、規則的に遂行されている。この種の会社が広大な領土を獲得し、母国の司法から解放された遠隔地に置かれるとすれば、金銭的利益が統治権をふるう大きな目的となるであろう。この会社の社員が、仕事の範囲から、また彼らにやむなく委任している暗黙の信頼からして、主人から独立するとなれば、「公共の利益」は口実として最も抑圧的な方策を正当化するために利用



されるということを、憂慮すべき理由がある。そして「相互に団結して行為し、自らの職権濫用の言い逃れをもっている商人集団が、恐れも恥じも知らず、住民を奪い、別の半球において、目も眩むような光輝ある存在に見えさせるだけでなく、彼らの富が獲得された手段を問い質すということから彼らを守りもすることができるとの財産を築き上げる」(p. 264)ということが憂慮されてしかるべきである。

報告は、こうした場合に犯された失政をしばしば余りにも強調し過ぎたり、間違っって描写したりしてきたことは、疑えないであろう。しかし、誇張の基礎には真実がある。一国の商人が無制限の権威を与えられているとすれば、彼らの利益は彼らの欲望に等しいものとなるであろうと、誰もが確信するに違いない。

このようにミラーは論評している。東インド会社批判は周知のようにスミスもまた手厳しく行った。特権と独占はどうすれば阻止できるか。スミスは消費者の利益を強調して商工業者階級の特権・既得権益を支援する重商主義政策を批判したが、政府が重商主義政策を放棄することはいかにして可能かについては、為政者への説得＝啓蒙に訴えるにとどまった (Smith [WN] Bk. III)。

ミラーも基本的にはスミスを踏襲しているように思われるが、議会改革＝為政者交代、民主化がミラーの視野にはあった。

以上でミラーのこの論説は終わる。ミラーが商業の精神に二面性を見ていることは重要である。全般的には商業精神と正義は一致する、しかしその一致は完全ではないというのがミラーの主張である。ミラーはまた、商業精神は寛大や仁愛とも対立するし、友情や家族愛とも対立する傾向があるとも言う。さらにまた、商業の精神は非行と結びつく場合があるという分析をミラーは行っている。ミラーは古代ローマの役人の強欲と東インド会社の独占を例にあげていた。いずれの場合も独占、独裁といった権力と結びついた場合である。利益を追求する商業精神は、やがてナショナリズムと結合して、対外的非行を生み出

すことにもなるが、そのような現象はまだミラーの視野には見えていない。しかし、商業精神がつねに正義と一致するとは言い切れない場合があるという分析は、現代人のわれわれの観察とも一致する注目すべき見解であろう。ではどうすればよいのか。もちろん、商業を否定することはミラーのプログラムにはない。いかにミラーがその精神においてシヴィック・ヒューマニストであったとしても、商業は経済社会の原理として独立を可能にする有益な技術であって、それを否定することはミラーの考えにはない。商業は封建的支配者の人格的支配に従属して暮らすほかなかった下層階級を解放し、自前で暮らすことのできる社会をもたらしたのであるし、さらには正義を社会に行き渡らせることも商業精神の成果である。しかし、問題は、商業精神が社会をすべて支配することになると生れる弊害である。商業と友爱、仁愛とのバランスをとることが望ましいとミラーは見ている。慈愛と友爱は商業の精神と対立するのであるが、親密圏に商業精神が入り込むことはよくないという分析によってミラーが期待したのは、そのような認識を市民がもつことであったと思われる。

もちろん、商人が全体として利益団体となって非行に走ることがないようにチェックする必要があるというのはミラーの見解である。スミスもまた独占批判を行って、自由競争、競争による権力のチェックの重要性を説いていた。ミラーは、自由競争の必要性には論及していないが、自由競争を維持するためにもさらなるチェックが必要であるということは、ミラーの視野にはあったであろう。誰がチェックするのか。どのような制度でチェックするのか。答えは明らかであろう。それが法の役割であり、立法と司法の仕事である。ここでミラーは法に踏み込んでいかないのは、問題が徳のレヴェルで論じられているからに他ならない。徳のレヴェルで答えをさがすとなれば、問題は、結局のところ、個人の啓蒙ということに帰着せざるをえない。もちろん、これはミラーの解答の一部であったと思われる。しかし、それがすべてではなかったということ、言うまでもないことのように思われる。

## 参考文献

- Millar, John [1803] *An Historical View of the English Government*, Vol. 4.
- Montesquieu [1973] *L'esprit de lois*, Garnier, 2 tomes. (野田他訳『法の精神』上中下, 岩波文庫, 1989年)。
- Smith, Adam [TMS] *The Theory of Moral Sentiments*, Glasgow ed., Oxford U.P., 1976. (水田洋訳 [1973] 『道德感情論』筑摩書房)。
- Smith, Adam [WN] *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, Oxford U.P., 1976. (大河内一男『国富論』I, II, III, 中央公論社, 1976年)。